幼保一体化施設の運営状況

－千代田区，掛川市，東員町の事例－

岩田俊二・中井加代子・佐古真由美・伊藤　遥・川島英里・蟹江真海・鈴木麻由・鈴木和香子

The Management Condition of the Unification Facilities with the Kindergarten and the Nursery School

- The Case of Chiyoda-ku, Kakegawa City and Toin-cho -

IWATA Shunji・NAKAI Kayoko・SAKO Mayumi・ITO Haruka・
KAWASHIMA Eri・KANIE Masami・SUZUKI Mayu・SUZUKI Wakako

1　はじめに

幼稚園と保育園との一体的運営は構造改革特区等全国各地で着実に拡大しており，その制度化が検討されている。その背景には少子化により幼稚園，保育園の独自運営が困難になってきていること，施設の老朽化により新規更新が必要な施設が多くあること，乳幼児の保護者の就労形態が多様化し，いわゆる「保育に欠ける乳幼児」が多くなってきていること，
幼稚園，保育園を問わず就学前教育への要求が拡大していることが挙げられる。本稿は全国でも先駆的に行われている幼保一体化施設の運営状況や施設内容について若干の調査を行った報告であり，今後の幼保一体化施設の展開にあたっての課題について考察したものである。調査対象施設は東京都千代田区立いずみこども園，静岡県掛川市立乳幼児センターすこやか，三重県東員町立三和幼稚園・みなみ保育園であり，千代田区いずみこども園は大都市，掛川市すこやかは地方都市，東員町三和幼稚園・みなみ保育園は中部圏都市整備区域内の近郊農村地域の事例として考えられる。

2　幼保一体化の経緯・背景

（1）千代田区立いずみこども園

千代田区は人口減少，人口高齢化が進み０～ 14 歳の年少人口も減少している。いずみこども園は秋葉原電気街の近く神田和泉町にあり，乳幼児保護者の就労形態の多様化が特徴の地域にある。和泉橋出張所管内でかねてから０歳児保育の要望があったため，昭和 50 年代後半，老朽化した佐久間小学校・幼稚園の改築に際して小学校・幼稚園の併設施設が検討され，更に幼稚園と保育園の組み合わせについても検討され，０～２歳児を「いずみ保育園」，３～５歳児を「和泉幼稚園」が担当する年齢区分方式が考えられた。３～５歳児については幼稚園教育を実施し，その保育時間を短時間保育と長時間保育に分け，保護者の就労形態に応じて選択可能なものにした。平成 10 年の国の「幼稚園と保育園の施設の共同化等に関する指針」を受けて，区では「幼稚園・保育園の連携のあり方」について検討を進め，平成 13 年４月から（仮称）こども園開設の準備を始め，平成 14 年４月いずみこども園が開設された。

（2）掛川市立乳幼児センターすこやか

掛川市の人口は近年，ゆるやかな増加傾向にあるものの，０～ 14 歳の年少人口は減少傾向にあって乳幼児の集団的保育が困難になっている。また，幼稚園，保育園の施設老朽化の問題や３歳児保育へのニーズの多様化から幼保一体化の方策が求められるようになった。平成６年，掛川市幼児教育あり方検討委員会，平成８年，掛川市幼稚園教育振興計画策定委員会，同年保育所のあり方検討委員会が設置された。平成 12 年３月，掛川市幼児教育振興計画が策定され，幼稚園・保育園再編計画が打ち出された。市内にある 26 の幼稚園・保育園について，６つの幼保園と２つの幼稚園に再編成する８園構想であった。平成 12 年，掛川市「（仮称）幼保園」建設検討委員会が設けられ，平成 15 年４月掛川市乳幼児センターすこやかが開園された。な

お，平成15年11月構造改革特区に認定された。

（3）東員町三和幼稚園・みなみ保育園

東員町の人口は平成 12 年を境に増加から減少に転じた。0～ 14 歳の年少人口も減少傾向にあり，乳幼児の集団的保育が困難になってきている。幼稚園と保育園とでは，就学前教育に格差があると見られ，いわゆる「ゆとり教育」の負の影響を就学前教育の強化により緩和させる必要があるとの見方から，平成6年，庁内に幼児教育プロジエクトチームが作られ，幼児教育の検討を始めた。平成9年，幼児教育検討委員会が設けられ，平成 11 年に町内で初めて東員保育園と神田幼稚園の合築が実現した。平成 17 年4月，三和幼稚園，みなみ保育園の一体化施設（合築）が開園した。

3　幼保一体化の方式

（1）千代田区立いずみこども園

いずみこども園は千代田区こども園条例に基づき，新たな乳幼児教育施設として位置づけられている。運営方式は年齢区分方式であり，0～2歳児を保育園認可施設，3～5歳児を幼稚園認可施設としているが，0～5歳児の保護者が保育時間のパターン（長時間保育，短時間保育）を選択できるようにしてある。0～5歳児までの一貫した方針に基づき乳幼児育成を行っている。定員は0歳児 12 人，1歳児 15 人，2歳児 16 人，3歳児 35 人（長時間 20 人，短時間 15 人），4歳児 35 人（長時間 20 人，短時間 15 人），5歳児 35 人（長時間 20 人，短時間 15 人）の 148 人である。施設は千代田区の幼保園，小学校，男女共同参画施設，ちよだパークサイドプラザ等の複合施設の一部であり，校庭の共同利用等特に小学校との連携が考えられている。

（2）掛川市乳幼児センターすこやか

すこやかは0～2歳児を保育園，3～5歳児を幼稚園と保育園に分けるがいわゆるコアタイム（8時半～13 時）において給食を含め幼稚園と保育園の共同活動を行う方式である。3～5歳児は年齢毎に幼稚園クラスが2，保育園クラスが1あって，保育室の配置は年齢毎にまとめられている。定員は0歳児 10 人，1歳児'22 人，2歳児 23 人，3歳児 63 人（うち保育は 25 人），4歳児は 72 人（保育は 24 人），5歳児は 74 人（保育は 27 人）の 264 人である。施設は幼稚園，保育園が一体化した総合施設が新設された。

表1　幼保一体化の方式

	運営	施設
いずみこども園	年齢区分方式	幼保総合施設（区立複合施設内）
すこやか	0～2歳児　保育園 3～5歳児　コアタイムは幼稚園保育園合同活動	幼保総合施設
三和幼稚園・みなみ保育園	0～2歳児　保育園 3～5歳児　コアタイムは幼稚園において年齢別混合編成	幼稚園保育園の合築

（3）東員町三和幼稚園・みなみ保育園

0～2歳児は保育園，3～5歳児は幼稚園と保育園との年齢別混合編成で8時半 12 時半まで幼稚園において保育を行い，その後幼稚園と保育園に分かれ，幼稚園児は帰宅，保育園児は保育園の保育室に戻り午睡に入る。施設は幼稚園舎と保育園舎の合築であり，施設の有効利用が課題である。

4　幼保一体化の効果

3つの施設から挙げられた良い点としては，①乳幼児の異年齢間の交流が深まり，兄弟の少ない幼児が保育について認識する機会が多い，②乳幼児の集団的保育が確保できる，③同一年齢で同じ教育・保育の就学前教育が可能，④保護者の就労形態の変化に柔軟に対応できる，⑤施設総合化により給食，共同調理，園庭の共同利用等が可能，⑥隣接する小学校や複合するコミュニティー施設との連携が積極化するといつたことがある。一方，幼稚園と保育園，あるいは長時間保育と短時間保育の保護者の保育にかんするニーズが調和せず，保護者間の相互理解に問題があるという指摘もある。

5　施設利用上の問題点

（1）千代田区立いずみこども園

いずみこども園の施設利用上の基本的な問題はこども園が千代田区の区民施設や小学校と一体となった複合施設の中の一部であり，かつ小学校施設の一部を改修して出来ていることが原因になっている。園庭－小学校と共用なので利用時間が非常に限定される。また，コンクリート仕上げは子どもにとつて危険である。階段－子ども園内に1階の保育室と2階の0～1歳児保

育室をつなぐ階段があるが，これは複合施設全体に作られているので，こども園の階段としては暗いなどのそぐわない面がある。１階ホールーこども園の多目的室として利用しているが，小学校の昇降口にもなっていおり，多目的室としては狭いと考えられる。エレベーターー２階の０～１歳児保育室の近くにあるエレベーターは複合施設全体に取り付けられているものであるが，０～１歳児室に直接，アクセスできるのは問題がある。０～１歳児保育室－保育室前に廊下があるのみで乳児の受け渡し場所がなく，豊かな共用スペースが必要である（図１）。

（２）掛川市乳幼児保健センターすこやか

すこやかは０歳から５歳までの幼稚園，保育園児を総合的に収容する総合施設として新規に建築された。そのため，規模の大きな施設になったことにともなう問題点が生じている。すこやかは遊戯室を中心にして，いわゆるフィンガープランを形成している。そのことによって３歳児保育室群と５歳児保育室群は自由に使用できる園庭に直接できなくなった。各フィンガー毎に年齢別に保育室群がまとめられているので，中央に遊戯室があるものの異年令間の交流が進まないと考えられる。細かい点では，５歳児保育室北側のベランダ，遊戯室の舞台裏の狭い通路，調理室のためのエレベーター等が死角になって監視できない。全体的にフィンガープランのために死角が多い。０，１，２歳児保育室に廊下がなく各室を横断することになるのは問題があるし，これらのこどものための園庭が狭く，外部空間でのあそびが制約される（図２）。

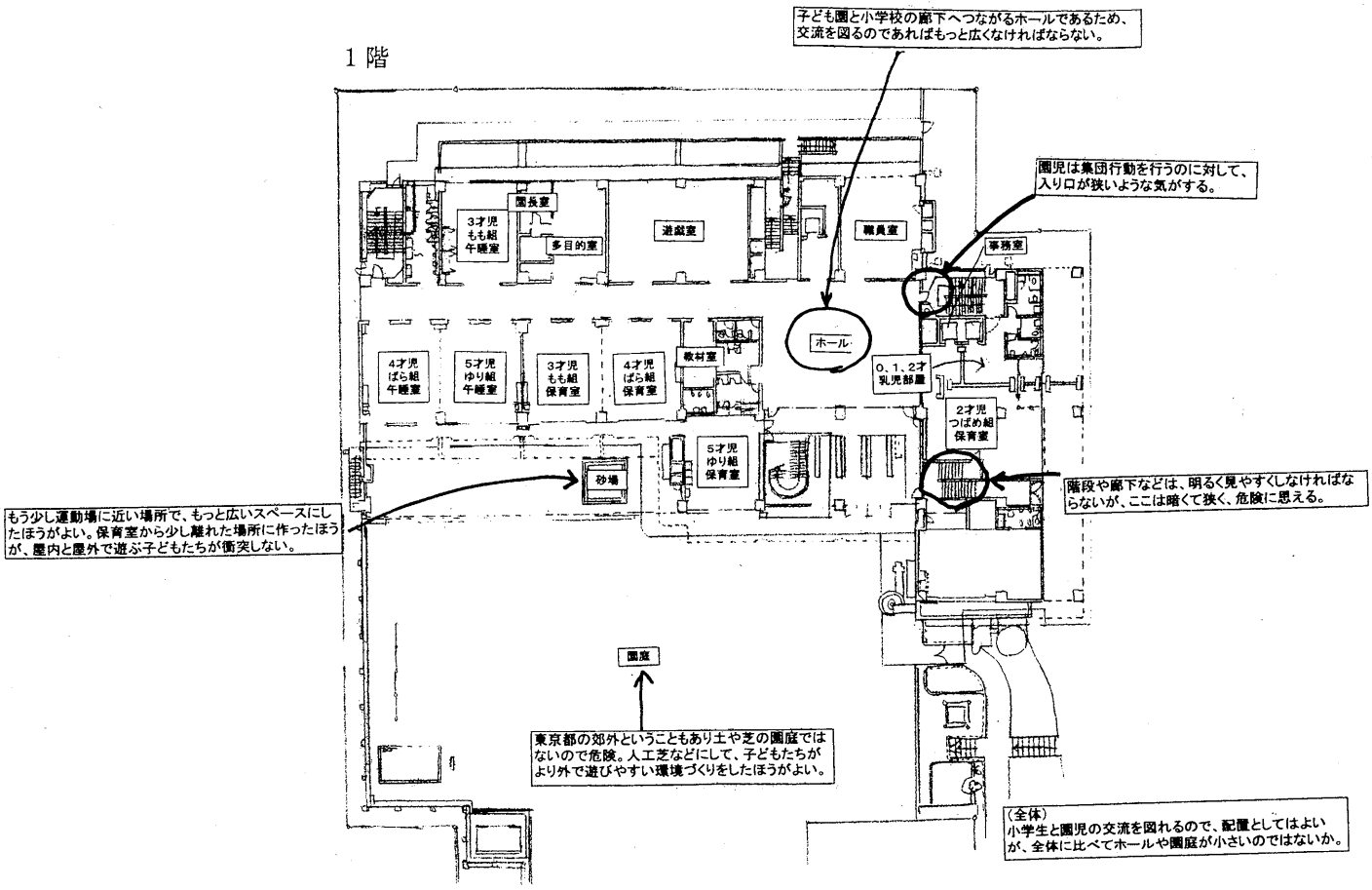
（３）東員町三和幼稚園・みなみ保育園

幼稚園と保育園の合築による問題が生じている。合築による物理的な問題として，園舎の裏，倉庫の裏，幼稚園と保育園をつなぐテラスなどに多くの死角を生じ，監視が行き渡らない問題がある。幼稚園と保育園は隣接しているものの，利用する立場から両園を総合的，弾力的に利用する運営を採ることができない。たとえば，コアタイムでは幼稚園の保育室で幼稚園児と保育園児が年齢別に保育を受けるが，コアタイムを過ぎると長時間保育児は保育園の保育室に戻り，午睡やその後の待機をすることになるが，保育施設として長時間保育に対応できる保育室とはなっていない。幼稚園と保育園の保育室を総合的に利用する運営方法を採用すれば良い効果が期待できる（図３）。

６　施設計画についての考察

３～５歳児の幼稚園児と保育園児の一体化が試行されているが，この年齢層の保育室については，共用の保育室とそれぞれのホームとなる保育室の２通りが必要ではないかと考える。いずみこども園ではコアタイムが終了すると，保育室の利用状況を凍結し，短時間保育児は帰園のためにホールで保護者の迎えを待つし，長時間保育児は午睡室に移る。こうした施設利用には無理が感じられ，コアタイム以外での保育室が必要ではないか思われる。すこやかでは幼稚園児と保育園児はそれぞれホームとなる保育室を持ち隣接しているが，遊戯室があるものの両園児の宥和の機会が少なくなるものと思われ，共用の保育室があつても良いのではないか。三和幼稚園・みなみ保育園では保育園児が幼稚園に出向き，コアタイムを過ごしているが，このことが保育園児の心理的負担にならないか懸念される。本研究は千代田区保健福祉部子育て推進室，同区立いずみこども園，掛川市生涯教育部幼児教育課，同市立乳幼児センターすこやか，東員町教育委員会学校教育課，同町立三和幼稚園・みなみ保育園のご協力を得て実施した。ここに改めて謝意を表します。

1 階



2 階

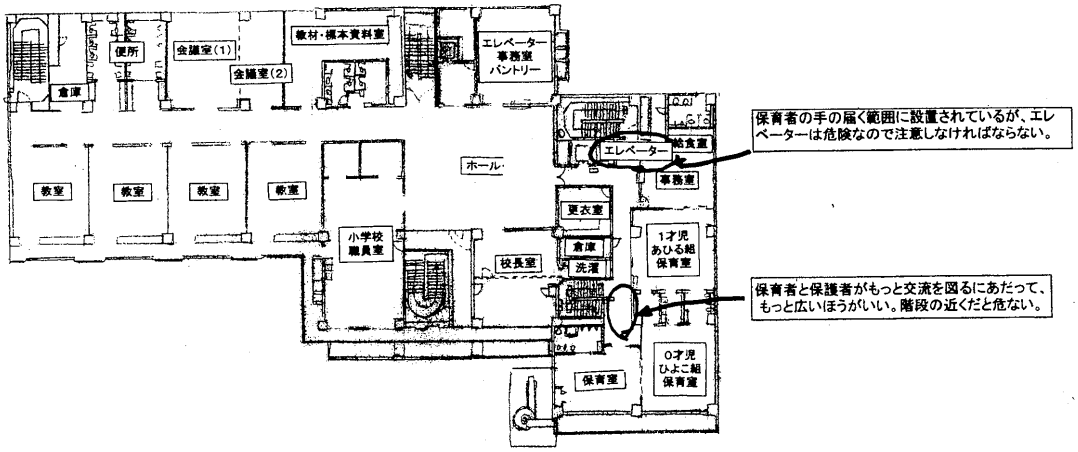
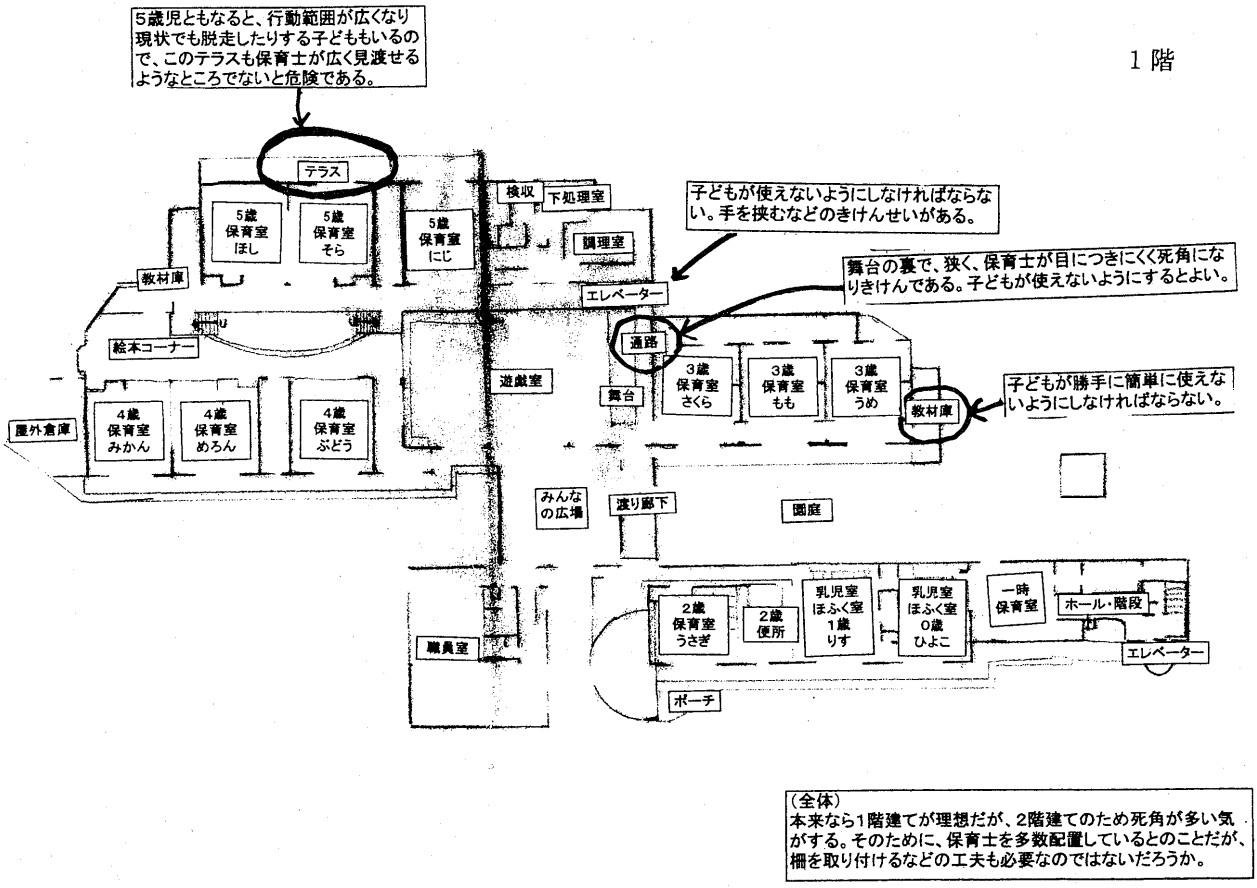


図１　千代田区立いずみこども園の問題点図



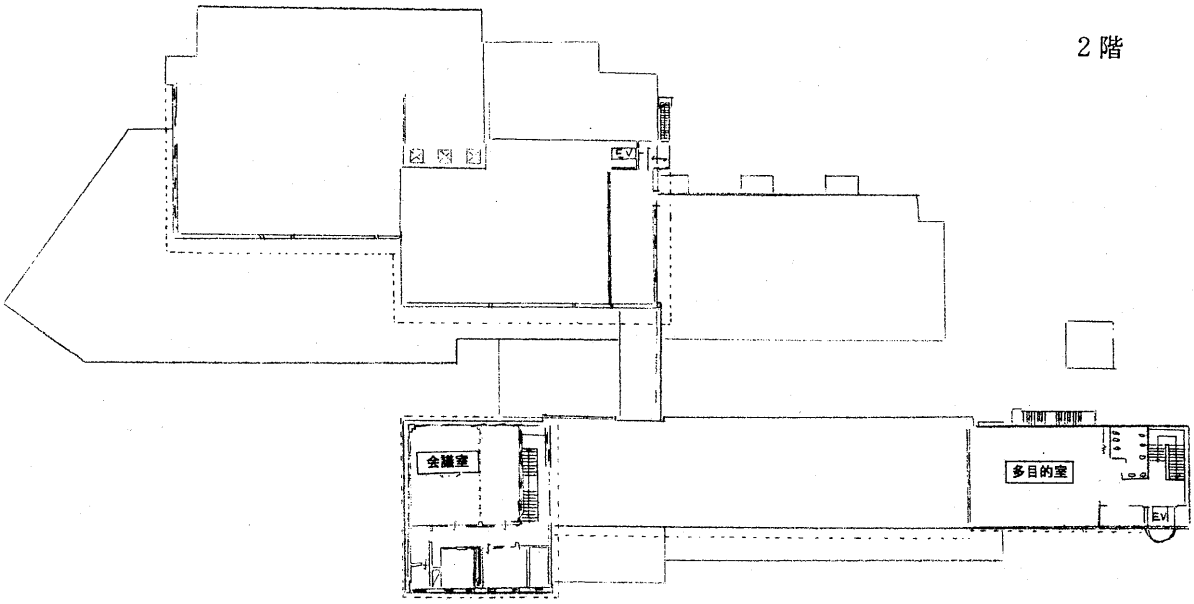
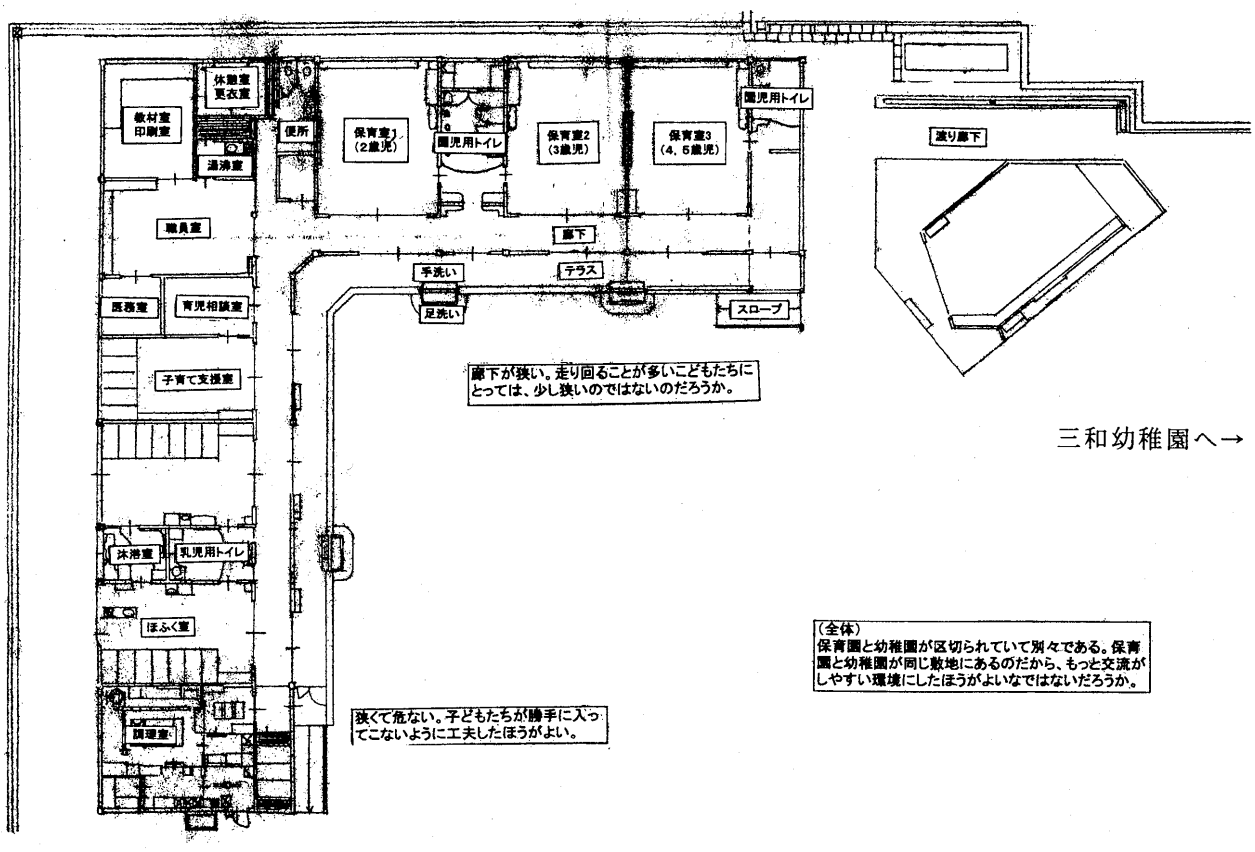


図2　掛川市乳幼児保健センターすこやかの問題点図

みなみ保育園



三和幼稚園

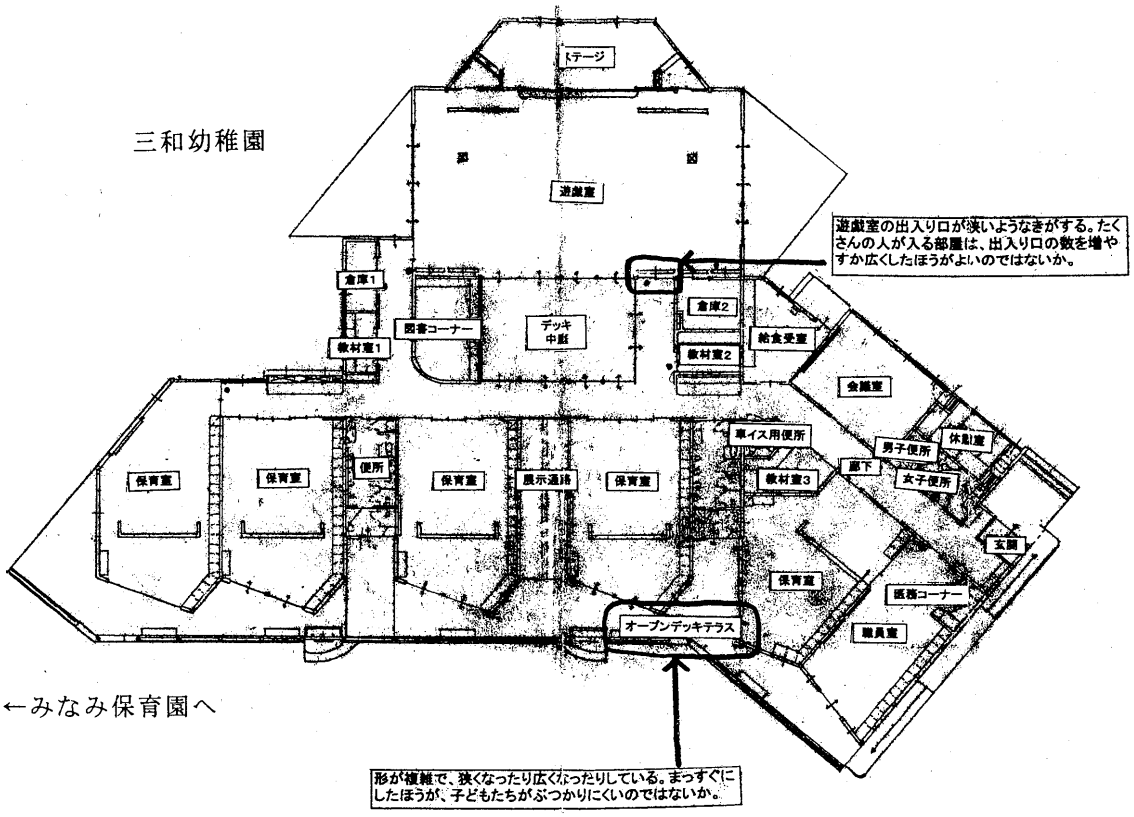


図３　東員町三和幼稚園・みなみ保育園の問題点図